Tulips University of Tsukuba Repository

安楽寺本系北野天神縁起について

著者	真保 亨
雑誌名	藝叢 : 筑波大学芸術学研究誌
巻	9
ページ	1-12
発行年	1993-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00152038

安楽寺本系北野天神縁起について

真保　亨

一　安楽寺本系についての研究をめぐって

安楽寺本とは『続群書類従』所収の『北野天神御縁起安楽寺本』(1)をいい、別の名を『安楽寺縁起』(2)とも呼んでいる。北野天神縁起の中では、唯一の真名本で、このことから荒木良雄氏(3)や菟田俊彦氏(4)によって、仮名本に先立つ原初的古本ではないかとも考えられた。その後村上学氏(5)は、この系統に属する諸本を博捜し、整理検討の結果、安楽寺本系が甲類第一種本(建久本系)の或る時期における改作とみる説を発表されている。

従来絵巻系の研究には、甲類(建久本・建保本・承久本等)、乙類(津田本・光信本・飛鳥井本等)、丙類(正嘉本・弘安本・松崎本等)のみが、その対象として取り上げられてきたが、この安楽寺本系縁起もその流布の状況からみて、絵巻制作に何らかの影響があったのではないかと私は考えている。縁起本文の研究では、既に村上学氏や松本隆信氏(6)の精緻な考証が行なわれている。従ってここでは絵巻への影響という立場から、安楽寺本系を俎上にのせ少しく検討を試みる次第である。

安楽寺本系詞書による古絵巻の遺品は、いままで知られていない。北野本地本のように部分的には用いているものがあったことも、私の指摘する(7)以前は全く調べられていなかった。安楽寺本系の本文を冒頭からそのまま詞書とした絵巻のなかったことは、殆どこの系統が、いままで美術史学の上で無視されてきた理由であった。安楽寺本系については、専ら『神道集』などの関係を通じて主に国文学上の研究対象として扱われてきたのである。ただ、安楽寺本系諸本の中には希に「絵アリ」(8)と記入されているものもあって、その絵が如何なる系統に属し、時代的にはどこまでさかのぼるか、或は近世の補加かも知れぬが、何れにせよ興味をひく。

最初に安楽寺本をとり上げたのは、荒木良雄氏(9)であった。同氏は、『神道集巻九』にみる「北野天神の事」との関わりから、『安楽寺本北野天神御縁起』(続群書類従所収)に注目された。そこで、次の理由から安楽寺本を原本とみる結論を導き出された。

一、安楽寺本(末尾の追加)には、「大江匡衡奉種々供物　色々御幣奏状云」と出処をあげ、「右大天満自在天神　塩梅天下　補導一人或為日月　於天上万民照覧　就中文道大祖　風月本主也　翰林人最可夙夜憑労書」の文節を掲げていること。

二、最後に追加せられている条が、原本に比照して脱落していたための補遺になっていることによって、現存の安楽寺本以前に、この系統に立つ漢文体の縁起原本の存在が察せられること。

三、安楽寺本に「寛弘元年十月廿一日一条院御宇　自行幸成給始以来　建久年中至　巳上十六代　積星霜二百歳也」や「爰一条院御宇　寛弘元年辛巳始従行幸成　承久元年己卯于今聖上十九代　積星霜二百十六年也云々」と重ね記しているのは、書き継がれていった成長を示すものであること。

「かくして天神縁起は、漢文体に起り絵巻に描かれ、仮名交り文の絵詞となるとともに、また安居院一流の説教者輩の手によって漢文風な形に採録せられたのであった。」と同氏は述べておられる。

この荒木氏説に対し同意見を唱えたのは、菟田俊彦氏（10）で、「北野縁起の原書が、もし真名書として作られていたならば、この安楽寺本は原書に近い形を伝えたものと云えよう。」と述べて、さらに真名書から仮名本に至る例を、『旧事本紀玄義』と『豊葦原神風和記』を引いて説き、「諸本に見られる少異は、真名本からの和文化によるものではなかろうか。」と結んでおられる。

先ず荒木氏説に反論されたのは、大野功氏（11）であって、荒木説を検討された結果、「安楽寺本からは縁起の原形に関する何ものも得られなかった。」と述べておられる。その理由として、荒木氏が説明材料として用いた安楽寺本補遺における「爰一条院御宇　寛弘元年辛巳始従行幸成　承久元年己卯于今聖上十九代　積星霜二百十六年也云々」とそれに続く「大江匡衡奉種々供物　色々御幣奏状云」の二つの文節が、承久本との比較によって切り離し得ないことを明らかにされ、これが現拠による補遺ではなく、「他本と比照することによって追加されたもの」とされたのである。荒木氏のいう書き継ぎについても、八月祭の段の、「寛弘元年十月廿一日一条院御宇　自行幸成給始以来　建久年中至巳上十六代　積星霜二百歳也」と補遺の、「爰一条院御宇　寛弘元年辛巳始従行幸成　承久元年己卯于今聖上十九代　積星霜二百十六年也云々」の二例において、年号が建久或は承久となったのは、それぞれ縁起の書写年代を示すもので、書き継ぎを想定するのは無理であると主張されたのである。

安楽寺本系の諸本を調査した上で、はじめて北野天神縁起における安楽寺本系の位置を明らかにされたのは、村上学氏（12）であった。同氏は、安楽寺本系の主要な七本をあげて検討された結果、荒木氏説を修正した大野功氏説にふれた上で、大野氏が安楽寺本（続群書類従本）のみを対象としたことから生じた誤りを、安楽寺本系諸本における字句の異同の例を引いて指摘され、「安楽寺本のみに問題を限定せず、同系統の全体に拡大するならば、極端な言い方をすればおおの氏の説はその論拠をすべて失うことになるのである。」と結んでおられる。

次で村上学氏は、安楽寺本系の本文を他の甲・乙・丙三系統と比較し、甲類第一種本（建久本系）だけに共通の句や文章が多数あるのに、乙、丙類とのみ共通の句や文章はほとんどないことから、建久本の系統に近似するものとみられた。ただ、甲類第一種本以外の系統との類似或は共通する説話・句については、「都良香羅城門詩作の段」を例に検討の結果次のように述べておられる。これは、乙類第二種特有の説話で、安楽寺本系と本文が酷似し、この説話の入る縁起本文中の位置を異にし、乙類第二種特有のもう一つの説話である「時平笑癖」を欠くことの三点から、「安楽寺本系諸本は、乙類第

二種本をシタジキにして本文を作成したのではなく、この説話を乙類第二種本から補ったものではないかと思われるのである。」と主張された。全体を見て、「本文は甲類第一種本から第二種本へ移行してゆく途中の本文を持っていた可能性はあるが、甲類第二種本を底に敷いて甲類第一種本を以て修補した本文から安楽寺本系諸本の本文が出発した可能性も、甲類第一種本を底に敷いて、甲類第二種本の本文を以て説話を削除した可能性はほとんどないと思われる。」と述べられ、結論として、「全体として原資料に最も近い形を持っている甲類第一種本に対して、省略も多く、修飾や説明的付加も多い安楽寺本系諸本の本文が先行することはあり得ない。」と言い切っておられる。従って、安楽寺本系を別に一類と認めて、「丁類または安楽寺本系統」と称することを提唱されている。安楽寺本系の特色としては、「省略と増補という二つの方法で一部原本の俤を残しながら全体としては大きな変容をなしとげた」とし、その成立を「甲類第一種本（乃至は二種本との中間的存在の本）から派生したもので、他系統の縁起が絵巻としてその発達を挿絵の方で行い、文章の方はその付随物としてむしろ頽していったのに対し、この系統の縁起はその序文に、（中略）縁起聴聞の功徳を強調するように語り物として文章を成長させていったものと思われるのである。」と位置付けておられるのである。

以上の如く、村上学氏の論は、荒木・大野両氏が続群書類従本のみを対象としたこととは違って、安楽寺本系の諸本を広く駆使して論じた画期的なものであったといえる。

これらの研究につづいて、安楽寺本系と絵巻の関係に触れたのは、松本隆信氏（13）である。同氏は、村上学氏の説に全面的な賛意を示した上で、安楽寺本系が絵巻系に対して持つ特徴を検討し、次のような結果を出された。先ず、序文にみられる甲類の「王城鎮守云々」が、天皇・宮廷貴族の守護神として北野天神を礼賛する態度を明瞭に打ち出しているのに対し、安楽寺本系は「庶民の求める現実的利益を強調」しており、「作者が決して貴族階層に向かって語りかけているのではない」と主張されている。大戒論序の段にみる安楽寺本系の「本山ノ許サレ是ナキ故ニ」の字句から、執筆者を「叡山を本山と仰ぐ僧」で「その勿体をつけた口ぶりは、叡山の上層部の僧ではない」と推定されている。都良香羅城門詩作の段については、乙類における本説話の挿入場所の矛盾点を指摘され、これに気付いた安楽寺本系が、挿入の場所を後に移したと見て、このことを「乙類本によって補入したことになる」とされ、さらに永仁六年（一二九八）の津田本にこの話が入っていないことから「安楽寺本系の成立は鎌倉末期以降に下ることも推測されるわけである。」と都良香羅城門詩作の段から安楽寺本系の成立年代をも推定されている。朱雀院行幸の段で、安楽寺本系が両帝密議を述べずに「両帝共ニサヽヤカセ御座シケル」と唐突な句が不用意に出てくるところを見ると、その箇所を省略したものと考えねばならないといわれている。日蔵上人巡歴の段では、承久本との関係に触れて、承久本の如き六道図は、「その時代に盛行していた六道思想によるもので、安楽寺本系に由来するとは言い難い」とされ、その理由として、安楽寺本系が、「地獄におちた延喜帝のことを、日蔵上人六道めぐりの頂点に据えて語る必要があったから」六道の順序を逆にしたと推測され、「もし両者の間に交渉があったとすれば、安楽寺本系の方が、承久本絵巻の影響をうけたものとみるべきではないか」と結んでおられる。最

後に、安楽寺本系が甲類本系に先立って成立したものでないことの理由として、北野天神縁起として欠かせない九条師輔社殿建立の段を省略したことをあげておられる。従って、「安楽寺本系は天神縁起の最も原態に近い本をもとにして、大幅な省略や増補を加えた」と唱えておられるのである。

註

（1）「北野天神御縁起　安楽寺本」　続群書類従巻七七所収

（2）内閣文庫蔵写本一冊が知られる他、『北野文叢』巻七四に抄文を載せる。

（3）荒木良雄氏　「『北野天神縁起絵巻』から「てんじん」まで」（『中世文学の形象と精神』所収　昭森社　一九四二年八月）

（4）菟田俊彦氏　「北野天神御縁起安楽寺本」（『群書解題』第一下　続群書類従完成会　一九六三年四月）

（5）村上学氏「神道集第九「北野天神事」ノート」上下（『名古屋大学国語国文学』一五・一七　一九六四年一一月・六五年一一月）

（6）松本隆信氏「中世における本地物の研究（四）――本地物の成立と北野天神縁起――」（『斯道文庫論集』一四　一九七七年一二月）

（7）拙稿「白描北野本地絵」（『美術研究』三四七号　一九九〇年三月）

（8）東坊城家本『北野天神御記』（宗淵編『北野文叢巻第二十』）

（9）荒木良雄氏前掲論文

（10）菟田俊彦氏前掲解題

（11）大野功氏「北野天神縁起の成立について」（『史学雑誌』六七編九　史学会　一九五八年九月）

（12）村上学氏前掲論文

（13）松本隆信氏　前掲論文　同氏の論述のうち、絵巻との関わりにのみ限定してこれを採らせてもらい、その文学性や神道集に関するものについては、ここでは触れないこととした。

二　安楽寺系本文の内容

安楽寺本系の諸本は、村上学氏（1）によって、次の七本が紹介された。

一　黒川本　『洛陽北野天神縁起』國學院大学蔵（黒川真頼旧蔵本）近世初期写本

二　梅椿坊本　『北野天神御縁起』（『北野文叢』所収）

三　赤木文庫本『天神御本地』横山重氏蔵　室町前期写本（『神道物語』所収）

四　一行坊本　『北野天神御縁起』（『北野文叢』所収）

五　安楽寺本　『安楽寺縁起』内閣文庫蔵　近世中期写本（『続群書類従』所収）

六　東坊城本　『北野天神御記』（『北野文叢』所収）

七　慶応本　『天神の本地』慶応大学図書館蔵　近世前期写本

その後、松本隆信氏（2）は、新たに四本を追加されている。それは、次の如くである。

八　東大本　『安楽寺縁起』東京大学図書館蔵

九　天理本　『天満大自在天神の御本地』天理図書館蔵　近世初期写本

一〇　広島本　『天神の本地』広島大学国語国文学研究室蔵　寛永二年写本

一一　天理別本　『天神のゑんぎ』天理図書館蔵　室町中期写本

このように諸本の数少なくないが、私はここで古絵巻北野聖廟絵（北野天神縁起）との詞書比較の対象として安楽寺本系をとりあげるに際し、この系統では最も古い康暦二年（一三八〇）の年紀ある筑波大学本（3）を中心として用いた。（次頁挿図参照）

絵巻の詞書に対応して、その内容を分けると以下のようになる。

一　序
二　幼稚化現の事
三　幼時詩作の事
四　大戒論序の事
五　良香邸弓遊の事
六　吉祥院五十賀の事
七　一時中十首詩作の事
八　都良香羅城門詩作の事
九　任大納言大将の事
一〇　任右大臣の事
一一　家集天覧の事
一二　朱雀院行幸の事
一三　時平讒言の事
一四　椋木法皇の事
一五　紅梅殿別離の事
一六　西下の事
一七　西下途中詠詩の事
一八　配所詠詩の事
一九　恩賜御衣の事
二〇　送後集長谷雄の事
二一　天拝山の事
二二　薨去の事
二三　安楽寺墓所の事
二四　柘榴天神の事
二五　清涼殿霹靂の事
二六　尊意鴨川渡水の事
二七　時平薨去の事
二八　時平子孫の事
二九　公忠蘇生奏上の事
三〇　菅公清涼殿化現の事
三一　清涼殿落雷の事
三二　延喜帝落飾崩御の事
三三　日蔵上人巡歴の事
三四　鉄窟苦所の事
三五　綾子託宣の事
三六　太郎丸託宣の事
三七　右近馬場相議の事
三八　社殿建立の事
三九　内裏造営の事
四〇　官位追贈の事
四一　待賢門院女房の事
四二　世尊寺阿闍梨仁俊の事
四三　仁和寺阿闍梨の事
四四　八月祭の事
四五　仁和寺西念の事
四六　銅細工娘の事

次にその各の本文について、諸本との比較検討を試みてみよう。

（一　序）周知の如く安楽寺本系本文の劈頭は、甲乙丙の三類と違っている。筑波大学本は、「風カニ聞三葉之葦　自開海上以来　砂長為山　塵積成国」となっており、或は「伝ェ聞ク三葉ノ葦（梅椿坊本）」など多少の異同はあるが、この序文は、安楽寺本系の一つの特徴ともいえる。中でも松本隆信氏の指摘された如く、「速ニ其人安穏ニ　里繁盛ス　家ニハ風雨水火ノ難ヲサケ　人ハ疲病盗賊ノ愁サケン（黒川本）」のように庶民の現実的利益を強調している点は、この縁起が王侯貴族のためでなく、広く一般の人々の為に起草されたものらしいことは全く同感である。また「況ヤ一度縁起聴聞シ一度名号ヲ唱ヘ……心ヲ尽シテ此レヲ誦ミ耳ヲ傾ケテ是ヲ聴聞スレハ（梅椿坊本）」のように、縁起を読み耳に聞かせることを述べている。これは安楽寺本系の縁起が、読み聞かせるものであって、目で見せ理解させる絵巻の為につくられたのでないことが明白に窺われるのである。

（二　幼稚化現の事）ここでは、「抑菅原院申ハ菅相公是善之家也」ではじまり、承久本の「菅原院と申は菅相公是善の家也」や津田本の「そもそもむかし菅相公是善菅原院と申家に」に近く、また津田本が末尾に「天満天神とそならせたまひける」とこの稚児がやがて

[redacted]

天神となるくだりを簡潔に述べている文と、「是北野天満大自在天神トモ申也（筑波大学本）」と結んでいるのと近く、両者との関係が窺われる。

（三　幼時詩作の事）諸本における菅公十一歳の詩作を、安楽寺本系筑波大学本等では、七歳とし、また梅椿坊本等で十一歳とするものもある。次いで十三四歳を安楽寺本系では十二三歳としているが、最後の十四歳詩作は一致している。安楽寺本系は最も詳しく述べているのに比し、承久本・さらに津田本では文が簡潔になっている。

（四　大戒論序の事）ここは承久本系が最も詳細で、安楽寺本系も慈覚大師の遺属の言など省略されている。津田本では更に省略が多い。この段で、松本隆信氏が安楽寺本系のみにある「本山云々」の字句から「叡山を本山と仰ぐ僧」の執筆であると考えられたのはその通りと思われる。

（五　良香邸弓遊の事）ここではむしろ安楽寺本系が一層詳しくなっているが、末尾の都良香らが驚きあさみ云々の一説は省略されている。これに続く献策の事の省かれている点は、むしろ丙類に近い。続群書類従本では、他本と対校して、献策の事を巻末に追加している。

（六　吉祥院五十賀の事）ここは諸本おおよそ一致している。

（七　一時中十首詩作の事）安楽寺本系は、「送春不用動舟車」の詩は省き、「其詩ハ扶桑集被載」としている。その他はほぼ同じだが、安楽寺本系はやや字句が多い。

（八　都良香羅城門詩作の事）この段は、丙類に属す文亀三年（一五〇三）の所謂光信本が採る他、甲類・乙類ともに見ないところである。内容は光信本ともほぼ同じである。建久本以下が何故これを採らなかったか、定かでないが、この説話は大江匡房の談話筆録である『江談抄』に既に見えており、下って鎌倉中期の『十訓抄』や『撰集抄』にも収められ広く世間に知られている。「気霽風梳新柳髪」の良香の詩は、夙に公任撰の『和漢朗詠集』に入って著名であり、これにまつわる説話が広がり、菅公説話と繋って天神縁起を構成する要素となっていったことが窺われる。このように本段が、他の江談抄関係説話とともに初期の北野天神縁起に収められていたことは考えられなくはない。乙類第二種（光信本等）より補ったとする村上学氏（4）の説は、両者の本文の酷似・説話の挿入位置・時平笑癖を安楽寺本系が欠くことの三点を理由としている。さらに松本隆信氏は、この決め手を説話の挿入位置にしぼって、補入説を擁護されたのである。

しかし、ここに一つの問題がある。都良香羅城門詩作の段を持つ乙類第二種本が、何故「其年の春都良香羅城門をとをりけるに」という書き出しでこの説話を挿入したのであろうか。前段の良香邸弓遊及び献策は、貞観十二年（八七〇）の事であるから、菅公は二十六歳の文章得業生で、その献策の際には、少内記で三十七歳の都良香が、問答の博士に任命されてその試験に当っている。松本隆信氏が指摘されているように、この都良香が同じ時期に、菅公の前で恥をかいたというのでは不自然であることはいうまでもないが、しかし、これは編年的に見れば、献策の次におく他ないのである。都良香は、元慶三年（八七九）二月歿しており、縁起では次段が寛平六年（八九四）の吉祥院五十賀となっている。これよりして、都良香羅城門詩作のことは、方略策及第後の貞観より元慶初年までの出来事と思われ、縁起としてはそのように書くべきであった。従って、

「其年の春」にはじまる書き出しは、乙類第二種本が同じ良香関係の説話ということで、他本より補入してこの箇所へ挿入した結果に他ならないと私は思うのである。縁起としてこの説話の編年的挿入を考慮して起草したなら、決してこのような書き出しの文にならなかったであろう。

説話の世界は、必ずしも人物の歿年に正確なわけではない。特にこの説話は、良香側からでなく菅公の側から生れたもので、縁起として都合のよい所へ収めたわけである。『撰集抄』には「延喜のはしめつかた　都良香　きさらきの十日ころ」とあり、『梅城録』にも「聖廟記云　寛平八年初春　大内記都朝臣良香　過羅城門」などとあって、良香歿してかなり後の事になっている。安楽寺本系の挿入された箇所は、寛平八年二十首詩作に次ぐ所にあり、応永三十二年（一四二五）の『梅城録』に引く聖廟記の年代とも一致しておりこの説話を入れた縁起文は、大体この箇所に落ち着くようである。従って私は、安楽寺本系のこの段が、乙類第二種本から補入されたとみることはあまり早計に過ぎると考えたのである。結局、乙類では、永仁六年（一二九八）の津田本になく、永徳三年（一三八三）の光増本（5）に収められているので、その間に補入されたものであろう。

（九　任大納言大将の事）ここでは、甲類にない天皇歴代交替のさまを、安楽寺本系は詳細に述べている。

（一〇　任右大臣の事）「昌泰二年二月にそ」の字句を、安楽寺本系は「昌泰二年ノ春御除目ニ」とある他ほぼ同じである。

（一一　家集天覧の事）安楽寺本系は、「門風自古是儒林」の御製を記した後に、拝領した菅丞相が、これを頭の上に載せた話などが加わっている。

（一二　朱雀院行幸の事）朱雀院行幸の段は、続群書類従本では巻末に追加するなど一見省略されているようにみえる。しかし、安楽寺本系諸本において、冒頭の昌泰三年朱雀院行幸云々の一節はこれを欠き、代って時平の無実讒奏によって配流左遷になることを述べる一節が入っており、次で左右大臣の比較に移り、最後に「両皇共ニサヽヤカセ給ケル（筑波大学本）」とあって、朱雀院行幸密議のさまを述べ、この段は独自のものとなっている。

（一三　時平讒言の事）光卿は大納言源光卿のことと思われるが安楽寺本系は光政卿（筑波大学本）・高光卿（続群書類従本）・光忠卿（梅椿坊本）などと誤記が見られる。文も異同多い。

（一四　椋木法皇の事）安楽寺本系は、「清涼殿の庭上に立せ給ける」とあって、「大庭の椋木云々」は省かれている。

（一五　紅梅殿別離の事）文の異同少なくなく、また安楽寺本系は一層詳細である。

（一六　西下の事）安楽寺本系にやや省略がみられる。

（一七　西下途中詠詩の事）冒頭の船上の人となるくだりは、安楽寺本系で省略されているが、全体では却って詳細な記述となっている。

（一八　配所詠詩の事）ここも安楽寺本系は記述がより詳しくなっている。

（一九　恩賜御衣の事）恩賜御衣の詩の後に続く、「都府楼纔看瓦色」以下の菅公の詩作の優れていたことを示すくだりは、安楽寺本系で省かれている。巻末補遺に見るその分は、きわめて短い。

（二〇　送後集長谷雄の事）長谷雄が悲嘆にくれた後、「藻思妙たえて天下にならひなし云々」の賛辞が安楽寺本系では省かれている。

その一方で、諸本にない記述、長谷雄や儒者多く集って後集を拝見したなど、絵画化する際に必要な状況描写も見出された。

（二一　天拝山の事）安楽寺本系は、ここでも詳細で、祭文が梵天まで上った箇所に続き、陳孔章や馬相如の故事を釈迦成仏の前に述べている。

（二二　薨去の事）ここは、全く異文で、安楽寺本系は、「延喜三年二月廿五日　太宰府ノエンノ木寺ト云所ニテ終ニ無墓成セ給ケリ」と簡略に記し、次で他本にない菅公の家族の悲しみについて記している。

（二三　安楽寺墓所の事）この段は、ほぼ同様だが、安楽寺本系としては、やはり安楽寺を称える一節が加わっていることは当然であろう。

（二四　柘榴天神の事）この菅公化来の話は、『尊意贈僧正伝』になく、おくれて『元亨釈書』に記載を見る。ここも安楽寺本系が詳細で、殊に菅公と尊意との問答は長文である。

（二五　清涼殿雷火の事）安楽寺本系のこの段は、きわめて長文である。この中で、時平の言葉の「日吉山王不覚シ給フナ」から、甲類に見えない当日の内裏守護神が日吉山王で、後に丙類の正嘉本で稲荷大明神と変わってくる。甲類の縁起では天台宗門の権威に拘るが故に山王が削除されているのに、同じ天台系の安楽寺本系に出てくるのは、両者に何らかの違いが認められる。これら山王・北野・稲荷の信仰史上の問題については、近藤喜博氏（6）の既に指摘されたところである。

（二六　尊意鴨川渡水の事）尊意鴨川渡水に関しては、柘榴天神段と同様『尊意贈僧正伝』になく、おくれて『元亨釈書』に記載を見る。従ってこの説話は、建久本が最も古いわけだが、建久本以下承久本等いづれも簡略な記述である。安楽寺本系は建久本系と異なって、きわめて長文であり、渡水の状況を詳しく述べ、最後に内裏参着後の尊意加持の有様を記している。

（二七　時平薨去の事）ここでも安楽寺本系は、その文章きわめて精細を尽くし、長きにわたっている。建久本が浄蔵の時平に対する祈祷に関し、「四月四日請よせ給て祈せ給けり」と簡単に記し、時平の両耳より青龍の頭が出るくだりが、いかにも唐突であるのに反し、安楽寺本系は、そこにいたる修法の様子を事細かに述べている。そして、浄蔵の父善相公に青龍が告げるのではなく、浄蔵に直接訴える内容となっている。

（二八　時平子孫の事）ほぼ同じだが、安楽寺本系は末尾に世の無常を述べるくだりが加わっている。

（二九　公忠蘇生奏上の事）建久本系が、公忠頓死の前後について全く触れていないのに比し、安楽寺本系は、公忠が来客の為酒を飲み過ぎたこと、それに対する妻子眷属の悲しみなどを詳しく述べている。奏上については、ほぼ同じである。

（三〇　菅公清涼殿化現の事）安楽寺本系は、「又部類神等の面々」の文を欠くが、「主上　大惶ノカセ玉ヒケルトカヤ（筑波大学本）」が加わっている。

（三一　清涼殿落雷の事）安楽寺本系で、是茂朝臣についての記載がない他は、建久本系に比べ内容は詳しい。

（三二　延喜帝落飾崩御の事）ここも、安楽寺本系はより詳細である。

（三三　日蔵上人巡歴の事）建久本系では、日蔵上人が笙窟修行中

息絶えて、蘇生するまでの間、「三界六道をみぬ所なかりけり」とその巡歴のあったことを記すが、その一々については述べていない。ところが、安楽寺本系は、「三界流転ノ間　四生六道ノスミカトシテミスト云処無リケリ　但シ空無辺　色無辺　無所有処　非想非々想等ノ　無色界ノ　四空所計ソ　見サリケリ（黒川本）」とあって、以下詳細に述べているのである。

即ち、先ず色界を構成する四禅十七天について記し、次で欲界に属する六欲天に触れた後、阿修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の様態を叙述している。殊に餓鬼道の描写に最も力を注いでいる。

（三四　鉄窟苦所の事）安楽寺本系は、八大地獄とその別所の構成を説いた後、等活地獄の別所として鉄窟地獄の有様を述べ、延喜帝と日蔵上人との対面に話が及んでいる。この中で、帝が語った五つの大罪は、やや諸本に異同があるが、続群書類従本によれば、「一　背父寛平法皇御命良久奉庭上見下咎、二　用讒臣申事無咎賢臣流罪之咎、三　菅丞相雷電之時不敷施祈祷咎、四　斎日不開本尊咎、五　憶日本王位珍人間着心深咎」このうち三以下の罪が著しく異なる。建久本系では、一と二が父法皇に関する罪で、三が賢臣に対する罪、四は「久しく国位をむさぼりて　あまたの仏法をほろぼすにあへる也」、五は「我身の怨敵の故に　他の衆を損害せる也」となっている。また建久本系にない日蔵上人に依頼した善根の内容も詳しく述べている。この段の末は、建久本系の如き災害の描写はなく、建久本系が鉄窟苦所の前に収めた太政威徳天城における菅公との対面の物語に充てている。

（三五　綾子託宣の事）ほぼ同じだが、「西京ニ有人ノ娘アヤコト云者（筑波大学本）」とあって、建久本系の如く「西京七条二坊に住せりし多治比の女あやことといふ者に」と差異をみせる。

（三六　良種童託宣の事）ここは、かなり異同がみられ、両系統とも省略等相半ばしている。

（三七　右近馬場相議の事）ここも異文であって、安楽寺本系には、最鎮等の人名は全く出てこない。

（三八　社殿建立の事）ほぼ同じだが、これに続く九条家の北野に対する寄与に関する記事は、安楽寺本系には一切省かれている。

（三九　内裏造営の事）虫食和歌をはじめ、ほぼ同様である。

（四〇　官位追贈の事）ここは異同少なくない。建久本系にみる絶句の詩の化現は、安楽寺本系で白石上の銘文の化現となり、次で菅公の御請文に関し、衆合地獄より小野道風を呼びだし書かしめた事や、内蔵寮御庫の宝物の事など建久本系にない話が続く。続群書類従本を除けば、安楽寺本系では「北野宮の繁盛は村上の御代より云々」の文は省かれている。

（四一　待賢門院女房の事）ほぼ同じだが、女房の暇については、建久本系の如く「七日いとま」とはなく、ただ「暇マヲ申テ（筑波大学本）」となっている。また、鳥羽院の御所に盗衣を捧げて現われた敷島について、正嘉本以降に頻出する狂舞の記述はみられない。

（四二　世尊寺阿闍梨仁俊の事）大体同様であるが、安楽寺本系は、最後にかの女房に関する世評を加えている。

（四三　仁和寺阿闍梨の事）ほぼ同じである。

（四四　八月祭の事）ほぼ同じであるが、末尾に「寛弘元年……建久マテハ已上十六代星霜二百歳……」の一文が加わっている。

（四五　仁和寺念西の事）末尾の彼岸七日の往生の記述に省略多い他は、建保本と同様である。僧を「西念」とせずに「念西」として

いることは、安楽寺本系の古体なるを示すものといえよう。北野本地本は「西念」を用いるが、その詞書は、ほぼ同様で北野本地本が安楽寺本系によって、仁和寺西念の段の詞書としたことがわかる。

（四六　銅細工娘の事）建保本に比し、省略少なくないが、建保本が、銅細工娘参篭の箇所で終っているのに対し、安楽寺本系では、これに続く銅細工娘受福の結びの一文が追加されている。ここも、北野本地本とほぼ同文であり、同系であるメトロポリタン本とも一致していることが知られる。ただ、それは仁和寺西念・銅細工娘の二段のみにいえることである。

註

（1）村上学氏　前掲論文　但し、名称は松本隆信氏の表記に従った。

（2）松本隆信氏　前掲論文

（3）「天満天神縁起」　筑波大学蔵一冊（横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第十　角川書店　一九八二年二月）に翻刻。脱文箇所は、國學院大学蔵「洛陽北野天神縁起」によって補ってある。

（4）村上学氏　前掲論文

（5）『北野文叢』巻二二　所収

（6）近藤喜博氏　「弘安本天神縁起成立の前後　上下」（『国華』七九七・七九八　一九五八年八・九月）

三　安楽寺本系の問題点

以上述べた如く、本文の諸本との比較によって、概ね次のことが言えるであろう。

安楽寺本系の本文は、建保本にみる仁和寺念西（西念）の事・銅細工娘の事の増補二段の存在によって、建保本を遡るものではなく、また受領播磨守御前となって栄耀をきわめる銅細工娘が父母のために堂塔を造りやがて出家往生するという結びの一文が追加されていることからも、建保本以降の成立と察せられる。

都良香羅城門詩作の段については、永徳三年（一三八三）の光増本（乙類、北野文叢所収）に至って初めて出現することから、丁類の成立を十四世紀に遅らせる考えが行なわれている。しかし、これについては前節で詳細に述べた如く、私は初期の縁起に含まれていた可能性を信じるもので、安楽寺本系の今おかれた本段の位置が縁起作成時における原位置とみて差し支えなく、むしろ光増本・光信本等乙類諸本が良香邸弓遊及び献策の次に挿入補加したと考えられるのである。

また、北野本地本は甲類中の古い一本として知られるが、この仁和寺念西・銅細工娘両段の詞書が安楽寺本系の最古本筑波大学本との比較で一致を示しており、安楽寺本系との関係を全く考慮されていなかった古絵巻が、やはり深く係わっていたことを示している。北野本地本が制作に際し、八月祭の事で終り仁和寺念西等の増補のない建久本系の祖本に加え、丁類から両段を補ったとみることができる。既に述べたように、私は北野本地本の成立を正嘉二年（一二五八）の正嘉本と永仁六年（一二九八）の津田本との間に置いているので、その原資料としての丁類縁起はおそらく十三世紀前半には出来上がっていたと推察するものである。

この丁類の特色である六道描写については、承久本の克明な表現

になる六道巻に相通ずるものがある。これは唱導性の強い丁類の精細な描写が、承久本に影響したと解釈してよいと思われる。松本隆信氏は「もし両者の間に交渉があったとすれば、安楽寺本系の方が承久本絵巻の影響をうけたものと見るべきでないか。」と述べているが、承久本は神宝として殆ど人の目に触れずに秘蔵されていた事を考えれば、とても他への影響を及ぼす事など不可能であろう。現在の承久本の完好な保存状態も秘蔵の厳重であったことを示している。制作に際し作られた下絵や或は摸本の類は絵師の間に拡がっていたとも想像されるが、縁起選者の手許までゆきわたったとはとても思われないのである。

いづれにせよ、丁類即ち安楽寺本系の縁起は、鎌倉時代十三世紀前半にその祖本の成立時期を想定することができる。これをそのまま詞書とした絵巻は見出されていないが、北野本地本の如く、その一部に用いたものもあり、またその精細な六道描写は、特に初期の絵巻に少なからぬ影響を及ぼしたのではなかろうか。

（しんぼ　とおる）